

地域と大学の連携および学生の協働に関する考察

～「学生維新 2009」「水仙ランド再生プロジェクト」の活動経験を通して～

福井工業大学 正会員 ○内村 雄二

1. 研究目的・方法

近年のまちづくり計画などでは、行政と市民の協働が重要であるが、とりわけ学生が市民として参加するケースが増えてきている⁽¹⁾。本研究は、標記に示す2つの活動経験を通して、地域での連携や協働のあり方について考察するとともに、当該研究分野における今後の研究課題を抽出することを目的とする(図1参照)。

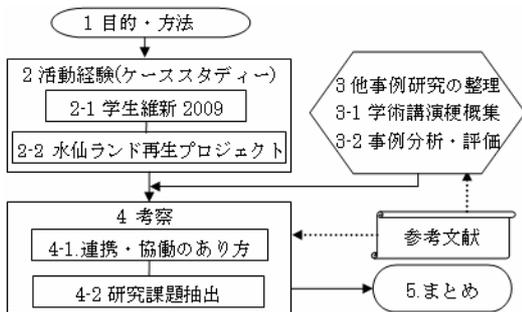


図1 研究フローチャート

2. 活動経験(ケーススタディー)

2-1 学生維新 2009

(1)目的および学生による協働研究と提言(表1、2参照)

福井県内4大学⁽²⁾のそれぞれの特性と専門力を活かし、福井市の要請⁽³⁾を受け、中心市街地におけるまちづくりに対するの学生による協働研究と提言を行うことを目的とする。表1のように4月から6月までの間に学生が主体となったWS⁽⁴⁾を行い、各大学教員の指導のもとに「福井のまちなか活性化策」を検討し、研究成果を「学生維新 2009」として発表した。

2-2 水仙ランド再生プロジェクト

(1)目的および各研究室の構想概要(表3、4参照)

水仙ランドは、越前町に位置する観光施設である。現在の水仙ランドは、入園者数が減少するとともに、季節による観光入込み客数の偏りが顕在化し衰退傾向にある。本プロジェクトは、そのような傾向にある水仙ランドを通年型の魅力ある施設として再生させるために立ち上がった。学生維新 2009 の成果を越前町に評価されたことを契機に、4大学1高専の7研究室の連携による、再生プロジェクト構想の提案が求められた。

表1 活動の流れ

日程・2009	活動内容
4/28 プレ ミーティング	・企画趣旨、スケジュール等説明、自己紹介、 教員紹介と『まちなかへの想い』、参画意思 の確認など。
5/12・5/19 グルーピング	・各大学の活動紹介、5人程度の無作為な グループに分かれて「事前課題の抽出(街の問 題点など)」を検討した。 ・抽出テーマは「新・仮設空間」「新・AOSSA」 「新・足羽川」「新・商店街」「新・夜の街」 「新・イベント」の6つとした ⁽⁵⁾ 。
6/9 WS	・WSの後半には全体で各グループの進行状 況報告を行った。同時に広報活動を開始(ポ スター、チラシ配布、メディアへのニュー ス・リリースなど)。
6/23 WS	・WSの後半に各グループの内部プレゼン を行った。駅前商店街の方も参加していた。
6/26 メディアPR	・福井テレビ『座・タイムリーふくい』に全 メンバーが招かれ、テレビ出演した。
6/27 発表	・西武ビルの2F公開広場にて最終プレゼン を開催した。市長も参加していて、地元メ ディア(福井放送、福井テレビ、福井新聞社) も取り上げてくれ、成功裡に終わった。

表2 提案概要

テーマ	概要
新・AOSSA	・まちなかで日本海の雄大さを感じることが できるように、既存の吹抜け空間を活用して 巨大な水槽を設置し、空間的に水族館的な利 用を図る。
新・商店街	・福井の緑豊かな自然を都市部にも享受させ て、自然の中にある商店街というコンセプト を設置し、新しい商店街を創り出すという提 案をした。
新・夜の街	・夜の中心市街地で遊びたいというコンセ プトから、夜限定で県庁に福井城を映し出 して城下町を復活させ、1950年代のサブカル チャーを取り入れた『新・福井城下町』をつ くる。
新・イベント	・駅前では数多くのイベントがあるが、学 生らしいイベントが見られない。そこで駅 前に4大学合同のキャンパスを作り、大学の 講義などを体験してもらいながら駅前に対 する愛着を深めてもらう。
新・仮設空間	・いつも見ている福井のまちの風景を変 えることはできないだろうか。現れては消 えるシャボン玉を空間形成の素材として『 シャボン玉+あつまる=広場』『シャボン 玉+やすむ=休憩所』などの5つのコン セプトにより、特徴ある空間を作り出す。
新・足羽川	・今、福井のまちには潤いやゆとりがない。 そんな現状を見て『まちにしみこむ』とい うコンセプトで、まちなかに足羽川やお堀 の水の潤いを呼び込もうとした。

表3 活動の流れ

日程・2009	活動内容
6/2・6/9 準備会	・まちなか研究室 ⁽⁶⁾ で研究室の協議会を開 く。(その後、各研究室で現地視察を行った。)
8/6 懇親会	・越前町長を迎えて、地域の住民と地元の 団体メンバーなど約70名とプロジェクト 事業のメンバーが集まって交流した。
9/4 プレ ミーティング	・企画趣旨、スケジュール等の確認を行 い、構想にあたって各セクションに分か れてWSを行い、その内容から共通キ ーワードを抽出した。キーコンセプトは 「自然」「岬」「水仙」「音楽」「シン ボル」とした。
以後各WS	(各研究室でWSを行い、計画案を作成した。)
10/1 中間報告会	・越前町舎にて各研究室の計画案の進 捗状況の報告を行った。
以後各WS	(引き続きWSを行い、計画案を作成した。)
11/3 最終報告会	・越前分館ホールにて地域住民を迎え ての各計画案の報告会を開催することが できた。

キーワード 大学と地域連携, 学生協働と住民参加, P I (パブリックインボルブメント)

連絡先 〒910-8505 福井市学園 3-6-1 福井工業大学 工学部土木環境工学科 TEL077-629-2453

3. 他事例研究の整理

表5は前述した梗概集⁽¹⁾より、大学や学生のまちづくり協働等の4事例を示したものである。これらから、協働のあり方には二つのパターンがみられる。まず、まちづくりの対象が明確に決定しておりその提案を求められ計画事業に反映する直接的関与、また調査・研究、広範なまちづくりのイベント等コンセプトやテーマを抽出し、今後のまちづくりに対して提言を行う間接的関与がある。水仙ランド再生プロジェクトは直接的関与に、学生維新2009は間接的関与に該当するものと考えられる。

4. 考察

本活動経験を通して、次のような点が知見として得られた。①連携・協働の意義は、提案する側の学生・研究室、それを受け入れる住民・行政の計画に対する機運を高めること、②様々な立場、考え方をまとめる手法で、多様な案が創出できること(新たなPIとして)にある。また今後の研究課題としては、①地域住民の意見をさらに十分取り入れる方策を講じること、②複数の発案に対して、最終的な合意案に至る際の効率的な手法(W/S等)、策定環境の創意工夫などがあげられる。

5. まとめ

大学と行政、地域住民との連携を構築し、学生がまちづくりにおいて、協働する機会を双方から持ち寄っていくことは、今後のまちづくりを支える有効な要素ではあるが、そのためには、両者間をつなぐ情報等媒介機能の拡充がより必要である。

表5 学生の参加・協働によるまちづくりの実例

大学名	著者名	論文名	目的	概要	結果
京都大(高山研究室)	寺田隆史 他3名	京都市都心部におけるまちづくり活動と連携した地域産材の活用に関する研究 -『京都・森と住まい100年の会』における実践を通じて-	明倫学区における「室外機カバー」の設置事例を取り上げ、その商品化と普及に大きな役割を果たした『百年の会』の活動の分析を通じて、まちづくり活動と連携した地域産材の活用プロセスを検討し、地域産材の活用に必要な組織と役割について明らかにする。	『百年の会』は林業経営、木材加工、住宅生産等の関係者を中心とする地域の人々に構成され「木育」活動を通して、地域の山とまちを結び情報発信を積極的に行っている。学生も運営メンバーとして事務局会議に参加し、運営業務を行うとともに活動の分析を行った。「室外機カバー」設置の取り組みは森林組合連合会と明倫まちづくり委員会で行った。当初双方の活動に接点はなく、まちづくり活動を推進する明倫まちづくり委員会が「室外機カバー」を検討する中で、明倫学区と繋がっていた木工組織と関係を持ち、『百年の会』を紹介することで森林組合連合会と繋がった。連携体制として商品化に向けてのしくみづくりを森林組合連合会が、パブリック作成を『百年の会』が担当した。作業を進める中で商品流通の運営体制のあり方に検討を行う必要性が浮き彫りになった。	木材を供給する森林組合連合会、木工組織、地域住民で構成される明倫まちづくり委員会の3つの組織が協働がまちづくり活動と連携した地域産材の活用が実現できていた。運営体制として『百年の会』主催による意見交換会が実施され、価格の見直しや組織間をコーディネートしていく主体の必要性が指摘された。地域産材を活用する一つの方向性として明倫まちづくり委員会のようなまちづくり活動を推進している組織が中心となり、『百年の会』のような地域産材の活用を目的とした情報発信している組織がこれを支援することが有効であると言える。
千葉大 大学院(北原研究室)	原田恒平 他2名	千葉市栄町における住民参加型まちづくりワークショップ -栄町まちづくり話し合い会を事例に-	千葉市栄町地区を対象に、地区コミュニティを維持しながら住民参加型まちづくりに取り組む方法論を回る。	『栄町』には2008年度から、『栄町話し合い会』が行われた。話し合い会は、「まちづくり再生計画」を作成することを目的とし、年一回開催される。一回目は「魅力と課題を他の共通認識とする」二回目は「学生によるまちづくり提案案」三回目は「具体的なまちづくり提案案」四回目は「まちづくり計画マップを作るためのキーワード及びまちづくりの提案」を目的として開催された。話し合いを通じて、三点の重要な事(住民の参加の意識)、「住民のまちづくりに対する意識」「住民の街に対する共通の認識」と、「コミュニティ」「建物」「通称」のキーワードが抽出された。	4つのキーワードをもとに提案を細分化し「まちづくりアイデアブック」としてまとめた。WSを行う上で一番重要なことは「住民参加意識」「住民のまちづくりに対する意識」「住民のまちづくりに対する共通認識」の三点であると考えられる。始めはこの三点が分散していたが、話し合い会を通じていく主体の必要性が指摘された。成果としてまちづくりのためのキーワードが抽出できた。今後、このキーワードからどのようにまちづくりを具体化していくかをさらに検討を重ねる。
明治大(山本研究室)	藤原正人 他1名	郊外住宅地における災害時の自主防災活動の課題抽出プログラム 川崎市月見台自治会との協働による実践事例報告	川崎市多摩区の月見台自治会まちづくり委員会と協働して取り組んだWSの実践事例を報告し、地域の特性を考慮した災害時の応急活動の抽出整理プログラムの構築の一助とする。	『月見台自治会まちづくり委員会』は、2007年に月見台まちづくり(プラン)を策定し、その事業計画のひとつとして「災害時の対応マニュアル作成」が定められた。WSはマニュアル作成に向けてプログラミングの段階からまちづくり委員会の担当者や協議を重ねていく。次のテーマで実施した。第1回「防災意識を高める」住民の防災活動の意識が十分でない点と、新たな住民の参加促進に留意し、防災点検WSを実施し、防災資源と防災上の課題を記したマップを作成した。第2回「自主防災活動課題抽出」第2回WSは抽出するプログラムの実験事例を報告し、時間軸と空間軸の両面からの抽出、整理方法と参加住民の理解に関する課題を示した。	アンケート結果から、震災発生時から生活復旧までの一連の被災時行動全体の理解度合いは高く、WSの効果も認められる。活動項目別の評価を見ると、消火活動に対する評価が低かった。これは、住民意識に災害発生時の地域での消火活動が確保されていないというハード面の整備課題が要因であると考えられる。本研究では、被災時の郊外住宅地において、住民が主体的に自主防災活動の課題を抽出するプログラムの実験事例を報告し、時間軸と空間軸の両面からの抽出、整理方法と参加住民の理解に関する課題を示した。
神奈川大(山崎研究室)	石坂佳美 他4名	鎌倉市大町地区におけるコミュニティ支援を意図したワークショップの実践と課題 その1 防災マップ作成支援と他1 防災マップ作成支援と他1 防災マップ作成支援を用いた防災空間情報提供	大町地区において、住民間のコミュニティ活性化及び町ぐるみの地域ネットワーク生成を目的としたコミュニティマップ作成プロジェクトを行った。プロジェクトの活動を報告し、成果・課題についての考察を行う。	『大町地区』は9つの自治会で構成されている。地区の多岐にわたるため、災害時には防災拠点までの距離が遠いなど様々な問題を抱えている。問題に対し学生が進行役となり4回のWSを行い地区住民、市職員との意見交換を回り、防災マップを作成した。また、このプロジェクトの中で、VuToと呼ぶ防災情報の体感型の提案を行った。災害発生時に被害が予想される場所、必要となる避難場所や消火器の位置を「音」と「映像」によって紹介する企画である。第9回のWSにてVuToの体験を行った。	新機軸だけでなく、目にする光景や災害が発生した時の状況は文字や記号では表せない部分があると感じ、防災において大町が抱えている様々な問題をより多くの方が認識するには、五感に訴えるようなものが大切であると考えVuToを行った。しかし、本報の目的であるコミュニティ形成に至るまでには至らなかった。次期の活動ではよりさらに焦点をおいた活動が望まれると考えている。

表4 各研究室の研究案

サイトプラン	武井研究室	自然保護という視点から、自然の管理について考え、本施設の名称、維持、管理のための新たな体制システム、土砂災害に対する安全対策についての提案。 ・名称:越前海上里園・管理のための施設、部署の新設 ・電気自動車を利用した環境への配慮 ・排水のための開水路を設置し、これを利用した滝、水力発電、井戸などの設置
	内村研究室	岬の自然園(ケープビレッジ)、『夕焼け岬産学』で『岬岬音と語り』の『灯台岬』の7つのストーリーを全体コンセプトとし、『歩』を新たなキーワードとして加入、歩いて楽しめる施設を提案。 ・移動手段にスロープカー、電気自動車の設置 ・エリア間を有機的につなぐ遊歩道の設置 ・越前町に自生している貴重な植物を利用した植栽配置 ・施設を楽しむための推奨移動ルートや施設の利用方法の提案
建築プラン	野島研究室	全体コンセプトはみんなでつくる、岬の自然公園3つの主体(学芸員・行政、地域の人々、利用者)により新水仙ランドを支える。計画プランは、『案内が地域をつなぐ』Aプラン、『販売による住民参加』Bプランを提案。Aプランは、水仙や海、絶景鑑賞といった自然環境の魅力を引き出し、高機能利用者がより深く自然と触れ合うことのできる体験型の自然公園。展示と体験を重要視した人が自然を正面から感じることのできる場を提供する。展示の面では野外ステージ、カフェ、ライブラリーを設け、体験の面では水仙などの山産品と体験を行える体験ビレッジとして研究施設や体験工房、簡単な休憩場の機能を有した建物を設置。BプランはAプランに多目的ホールや音楽スタジオを新たに追加した自然と音楽、自然と結ぶ式といった新たな自然の楽しみを提案。・演奏会や結婚式、セレモニーなどを行える。
	下川研究室	「自然+音楽」をコンセプトとしそこに学びの要素を加え自然の魅力を強化する。 既存施設を有効利用したリフォームで新たな施設利用を提案。また、自然の魅力を感じることができる場所の個性を最大限に活かす、日常的使用ならびに非日常的使用に対応する用途を考案。 ・自然の中でライブを楽しみながら食を堪能できる地中海風レストラン ・既存のハーブ園を利用したハーブカフェ ・緑の学習施設(子供の遊場も併設) ・さまざまなイベントを行う空間として多目的ホール(ブライダル、プレゼン、展示)
構想とソフト	辻野・江本研究室	「考える、感じる」をテーマに子供たちに全身で自然を感じてもらうことをコンセプトに「岬の自然が育む(子供)未来園」を提案。 ・ドライブストップとしての位置づけのOFFICE&SHOP「305」(総合案内所としての機能も併用) ・あーとスタジオ(待ちカフェ+あーとぶっしゅルーム+スタジオ岬)。ここでは子供を待つ大人のための空間や創作活動のできる教室、学生を中心とした吹奏楽団の練習場として広く開放。 ・ベル&ブライダル、既存の東屋を改修してベルを設置、現水仙の館を改築し披露宴会場。灯台の修景事業のみを行い、象徴性を高める。巨大スロープや体験型施設を配置した岬アスレチック&学びの丘
	金田研究室	周囲に民家が点在していないポイントを活かした吹奏楽団のための合宿施設、練習施設の計画。 ・結婚式:披露宴会場、音楽ライブ、コンベンション会場などのイベント利用 ・森原研究室
		SWOT分析(S:強みW:弱みO:機会T:脅威)を用いた越前町の戦略オプションを抽出。 ・顧客ターゲットを2者に絞った、冬季以外のピーク獲得。さらに、顧客セグメントを女性、高齢者、大学生、団塊の世代、外国人に分け、それぞれに合ったソフトを提案 ・風景美やゆったりとした時間の流れを活かし、一時的、もしくは長期間に息抜きができる場の提供 ・滞りない社会(復旧施設)学園の設置など、大自然の中で生活することや、世代を超えた人間関係を築くことなど、「福井の当たり前」を事業展開する

補注

- (1) 2009年度大会(東北)『学術講演梗概集 F-1 都市計画・建築社会システム』(日本建築学会)の当該事例研究を見るだけでも、約20編以上の報告が見られた。
- (2) 4大学とは、福井大学、福井県立大学、仁愛大学、本学。
- (3) 福井市のまちなか研究室事業という学生が旧生活倉庫跡の1階空間を活用するための施策。
- (4) WS:ワークショップ(研究集会、体験型講座)
- (6) *:学生が直接関与したまちづくり活動

参考文献

- ① 2009年度大会(東北)『学術講演梗概集 F-1 都市計画・建築社会システム』(日本建築学会)
- ② 『学生維新2009』報告書
- ③ 『水仙ランド再生プロジェクト』中間報告書